

『竹林的故事』の周辺——周作人と馮文炳

村田裕子

序

一 作家・馮文炳の肖像

二 『竹林的故事』

三 周作人と馮文炳

1 二〇年代前期の周作人

2 『竹林的故事』における周作人の影響

結 び

序

一九一〇年代後期に起こった文学の新潮流は二〇年代に入ると既存の文学界を脅かし、旧勢力を駆逐して、文学の新時代が到来した。文学思想、文体、題材の各方面に劃時代的な変化が起こった。小説の面に限つていうと、女流作家が中心となり、社会問題を扱う問題小説、文学研究会を中心とする人生派の文学、これに対抗して創造社が唱えた

芸術のための芸術の文学、そして特定の社団ではないが、郷土という題材に注目しそれを描いた郷土文学などが登場した。楊義はこのような五四時期（一九一九～二七年）の現代小説について次のようにまとめている。

創生期の現代小説は覚醒者と叛逆者の文学であった。写実的であろうと、風刺的であろうと、ロマン主義的であろうと、作品はすべて社会批判や社会への反抗の傾向をもっていた。批判や反抗のために、多くは上流社会の人物の醜悪さ、下層の人物の苦しみと暗愚、インテリ青年の苦悩と不安の心理を書き、それによって、人々の目を社会の改造に向けさせ、改革への奮起を引き起こそうとした。^①

郷土文学はこのような文学潮流のなかで生まれた。農村を描くということは、直接間接にその社会における問題を描き出すことにつながる。当時中国に普遍的に存在した農村の貧困や封建的な因習、迷信のもとで苦しむ無力で愚かな人々のありさまを写實的に描くことは、中国の抱える厳しい現実を認識させるために効果的であった。

郷土文学に先鞭をつけたのは魯迅であった。「故郷」、「祝福」、「阿Q正伝」などの優れた作品は多くの文学青年を刺激し、とくに北京在住であった同郷者の許欽文、王魯彦などはその薰陶を受けて写実派の郷土文学を創作した。一九二〇年代初期、地方を描いた文学、或は文学の地方色の重要性についてコメントした文学者は、魯迅のほかに茅盾、聞一多^②、そして周作人が挙げられる。

魯迅が郷土文学に果たした役割はよく知られているが、周作人の場合はあまり取り上げられないことが多い。周作人は郷土文学にどのようにかかわったのであろうか。周作人自身には郷土文学の創作というものはないが、周作人の高弟として知られている馮文炳^③の廬名は許欽文、王魯彦らとは異なる特異な作風の郷土文学作品を残している。馮文炳の文学、馮文炳と周作人の文学的かかわりを探ることで、周作人が郷土文学に果たした役割を知ることができるのではないだろうか。本論文では馮文炳の処女小説集『竹林的故事』を中心にして、周作人が郷土文学に果たした役割を

探っていきたい。

一 作家・馮文炳の肖像

周作人は一九四四年占領下の北京で著者不在のままに編まれた廃名（馮文炳）『談新詩』^③におさめられた「懷廢名」^④に、つぎのように書いている。

私が廃名を知ったのは民国一〇年以前のこと、今から二〇年前である。その間記すべきことは多いが、よく考えると空漠としていて、どこから書き始めたものだろうか。廃名の風貌は変わっていた。彼の額はカマキリのようで、声はしゃがれていて、初対面の人は彼が何をいつているのか聴き取れなかった。彼の書く文章はたいへんすばらしいが、西山に隠棲する前後の『莫須有先生伝』と『橋』はともにそうなのだがただ難解である。廃名は私の家に寄宿したことがあり、いつも親戚のようにつきあってきた。

周作人が馮文炳を知ったのは、一九一八年馮文炳がまだ湖北第一師範の学生の時であった。馮文炳は雑誌『新青年』をつうじて新文学への情熱をかきたてられ、やがて二二年周作人が教鞭を執っていた北京大学に入学し、ふたりの親交がはじまった。周作人は馮文炳の文学を格別に愛していた。このことは周作人が馮文炳の作品集の殆どに序もしくは跋を書いているという事実からも推測に難くない。一方、馮文炳が周作人にたいして抱いていた尊崇の念も並々ならぬものがあつた。これは廃名「知堂先生」^⑤によくあらわれている。馮文炳は周作人の「四大門生」^⑥のひとつりと公認され、師弟愛の堅い絆で結ばれていた。師・周作人が弟子・馮文炳に与えた影響は測り知れないものがある。周作人が馮文炳文学に与えた影響を考えるにあたって、周作人がかくも愛した馮文炳とはどんな人物だったのか、まずその

生涯をたどってみよう。

馮文炳（本名同じ）は一九〇一年一月九日、湖北省黄梅県に生まれた。祖父は竹細工師、父は工部局で教師をしており、裕福な家庭であった。馮文炳は五人兄弟の真ん中で、兄弟姉妹がひとりずついた。一九〇六年地元の私塾に通い始め、『三字経』、『百家姓』などを学んだが、「私が受けた教育はまったく百害あって一利なしであった」^⑤。だが、幼少時代は辛い思い出ばかりではなかった。「自然だけが私にとってすばらしかった。家は城内にあったが、〔馮文炳が暮らす〕母方の実家は城内から二里ほど離れた村にあり、一〇才以前はまさに陶淵明のいう『良辰を懐うて以て孤り往き』^⑥というとおりの暮らしをしたので、二〇年後に文学の仕事を成し遂げたのだ」と、彼はのちに書いている。

馮文炳の生まれ育った黄梅県は湖北省と安徽省の境に位置し、南には長江の悠々たる流れがあり、その向こうには九江や廬山がある風光明媚な「魚米之郷」である。ここはまた、唐代に王仙芝率いる農民反乱軍や太平天国軍の古戦場であった。だがこのような戦いの歴史より、故郷の風土が育んだ伝統文化が馮文炳その人に強い影響を与えた。その一つは仏教である。黄梅県には五祖寺など多くの禪寺があり、彼は五祖寺で「完全で円満な世界」^⑩を体験した幼少期の思い出をのちに書いている。俗塵を離れた別世界は馮文炳の文学に多くのインスピレーションを与えたであろう。また、黄梅県の長江を隔てた対岸の九江（潯陽）は陶淵明の故郷である。伝説や異志には彼が黄梅県を訪れたという記載があるそうだ。馮文炳は「現実を逃避」して「古代の陶淵明や李商隠が詩を書いたように小説を書いた」^⑪とのちに告白しているが、後述するように馮文炳の文学世界が陶淵明的隠逸性に彩られているのは、このような地縁的つながりと無縁ではあるまい。

一三年馮文炳は黄梅県八角亭初級師範に進学し、一六年卒業した。父は彼を丁稚奉公に出そうとしたが、馮文炳は

それを嫌って家出し、兄が通っていた武昌の湖北第一師範に入学した。卒業後、武昌のある小学校の教師になった。武昌の学生時代に馮文炳はじめて新文学に触れた。その出会いは奇妙なものだった。一七年頃、北京大学出身の新任国語教師がその授業第一日目に、黒板に突然詩を書きだした。胡適の「蝴蝶」¹²だった。そして彼はこう叫んだ。

「君たち見たまえ、これは何なんだ！いま何と大学教師がこんな詩を作っているんだ！新文学を提唱するとかぬかしで！」馮文炳はその時、この教師の表情だけが印象に残って「蝴蝶」については「好感も嫌悪もなくおもしろくも可笑しくもなく、ただ胡適という名は新鮮だな」と思っただけだった。そのとき、一九年に周作人の新詩「小河」¹⁴に感激して「文学を終生の仕事にしよう」と考えるにいたるなどとは、馮文炳自身も予想だにできなかった。

一九二二年、馮文炳は北京大学預科に入学、周作人と直接交流する機会を得た。二年後、北京大学英文学科に進学するが、預科在学中から新文学の創作をはじめ、胡適主編の『努力週報』に作品を発表した。二三年三月には馮至らとともに浅草社¹⁵に参加する。魯迅はかつて「『浅草』で片鱗を示した作家」¹⁶と馮文炳の初期の印象を書いた。彼は専攻の英文学では、シェイクスピア、ハーディ、エリオットを好んだ。また周作人の勧めによって「ドン・キホーテ」や陶淵明、李商隱の詩を読むほか、周作人訳『現代日本小説集』¹⁷、魯迅『呐喊』などを愛読した。二四年一月語絲社が成立するとそのメンバーとなり、『語絲』が停刊するまでここに寄稿した。代表的長編小説『橋』の各章は「語絲」に発表されたものである。二五年、北新書局より処女小説集『竹林的故事』が出版された。

周作人の援助を受けて作家として順調に歩みだした馮文炳であったが、二六年六月、「昨日より我が名は不要になつたので、名を『廢名』とする」¹⁸として、これ以後新中国成立まで廢名というペンネームで作品を発表する。馮文炳は何故「名を廢する」という象徴的なペンネームを用いることにしたのであるか。それは彼の内面的変化の結果であった。馮文炳は「この四年間に何度も脱皮し、とりわけこの一年は脱皮して風変わりになった」¹⁹ため、その「記念とし

て「廢名と名のるのだと説明している⁽²⁰⁾。馮文炳から廢名への変化は作風にも反映する。趙聰によると『竹林的故事』は文学青年たちに歓迎されたが、続く『棗』、『橋』は少数の仲間たちに賞賛されるにとどまり、後期の『莫須有先生伝』にいたっては「彼の師たる周作人でさえよく理解できなかった」という⁽²¹⁾。精練された美文とともに馮文炳の文学を特色づける「晦渋」さが増していったのである。馮文炳のこのような変化の背景として魯迅・周作人兄弟の義絶事件が重要であるとする説もある⁽²²⁾。廢名以前と以後の文学的变化についてはその背景も含めてあらためてより詳細に考察する必要がある。

さて、北京大学で研究や創作に充実した日々を送っていた馮文炳にとって衝撃的な事件が起こる。一九二七年北京に入城した張作霖が北京大学を解散し、他の大学と併合して京師大学校と改称したのである。周作人はこの渦中において、教職を解雇された。彼はこの事件にいたく憤り、「失学（学業を中断）」する。寄る辺を失った彼は一時北京西郊外の西山に移り住むが、生活はひどく苦しく食べ物にもこと欠くありさまであった。周作人はこんな惨状をみかねて、住いと職（私立中学の教師）を都合してやった。半年後、馮文炳は再び西山の正黄旗村に移り住んだ。西山の生活は余程馮文炳の気質にあっていたと見えて、彼は以後ここで冬を過ごすようになり、その住居を「常出屋齋」と名づけた。この頃、同郷の熊十力と頻繁に往来し、儒教や仏教について論じあっていた⁽²³⁾。周作人によると馮文炳は隠逸的である反面、内面に非常な激しさを蔵していたという。「失学」は馮文炳の激しい一面を髣髴とさせるべきことだった。

一九二八年、北京大学が回復すると、馮文炳は復学し、翌年卒業する。卒業後、周作人の推薦によって北京大学中国文学科の講師に採用された。この破格の人事からも周作人・馮文炳の師弟関係の緊密さを知ることができよう。馮文炳は李義山や温庭筠、新詩を講じた。彼は新詩の分野での功績も大きく、その影響下に何其芳や卞之琳が育っていた。定職を得てのち、故郷より妻子をよびよせ、馮文炳の生活は安定した。生活の安定は創作を豊かにした。三〇年

代前半は彼にとって多作の時期だった。三〇年五月には文芸雑誌『駱駝草』²⁴を馮至とともに創刊した。この雑誌は周作人の意向を反映したものだ。周作人は『語絲』以後、文芸雑誌を創刊する腹案をもっていて、二六年、北新書局より『駱駝』を刊行するが、さまざまな理由で続刊できずにいた。『駱駝草』はこのような状況のもと創刊した。馮文炳の作品としては『橋』、『莫須有先生伝』の一部が掲載された。そのほか、『橋』第二部が書き継がれ、さらに『人間世』、『宇宙風』に小品文を幾篇か寄稿した。また、三六年一〇月より周作人らとともに『世界日報』副刊『明珠』²⁵の編集をおこない、寄稿もした。

日中戦争勃発前夜の三七年、馮文炳は母の病のため、妻子を故郷に帰し、自分は以前から親交のあったラマ僧を頼って雍和宮に移り住んだ。七七事变後、北京は日本軍に占領され、北京大学は南遷することになったが、周作人はここにとどまった。馮文炳は当然師とともに北京に留るはずであったが、母が病逝したため帰郷し、そのうちに戦火が激しくなって北京に戻ることかなわず、ついに抗戦勝利まで故郷で過ごすことになったのである。

彼が勤めた小学校は大変な僻地にあり、口語の教科書さえない前近代的な学校だったので、彼は自分で教材を作らなければならなかった。その後、黄梅県初級中学の英語教師となったが、状況はさほど変わらなかった。馮文炳は周作人への手紙²⁶で次のように書いている。

学生は皆この村の者で、新制ではありませんが、やや昔の風習があつて先生に薪や米を納めてくれるので、生活を維持していけるのです。私の家は町から十五里離れた祠堂にあり、学校から五十里離れています。山を越えなければなりません。山道は五里に過ぎないのですが、五十里の道のりはこの五里のために大変です。

馮文炳の日中戦争中の創作は少なかったが、十年の避難生活は「莫須有先生坐飛機以後」という作品に結実した。また、熊十力『新唯識論』に反発して、『阿頼耶識論』²⁷を執筆した。

四六年北京大学が回復すると、馮文炳は招かれて北京へ戻った。北京への途次、当時裁判のために南京の老虎橋の監獄に収監されていた周作人に面会している。北京大学へ復職ののち、馮文炳は再び創作を始め、「莫須有先生坐飛機以後」を『文学雜誌』²⁸に発表した。未完に終わった。

人民共和国成立後、高等院校の改編が実施され、馮文炳は五二年東北人民大学（現吉林大学）中文科に転任した。以後創作活動はおこなわず、論文数編を発表したにとどまった。馮文炳は以前の自分の処世態度を恥じて、積極的に政治参加する新中国の理想的知識人に生まれ変わろうと努めた²⁹。しかし、現実は本意なものであった。彼は北京で「下之琳や何其芳にどうして私は作家協会に参加できないのか、どうして一部の人は私を文学界から抹殺しようとするのかきいてみた。本当に不可解だ」、「転任させられた時、私はここが私を必要としていると思ったのに、実はそうではなく、半年あまり仕事を与えられなかった」などと不満を述べたという³⁰。彼のような経歴をもった知識人が新中国で生き難かったことは想像に難くない。やがて馮文炳は癌を患って、文化大革命のさなかの六七年一〇月七日その生涯を終えた。

馮文炳が残した作品は以下のとおりであるが、近年いくつかの選集³¹が出され、評価の見直しが始まっている。

一・短編小説集：『竹林的故事』北新書局、二五年七月。『桃園』北京古城書社、二八年二月。『棗』上海開明書店、三一年一〇月。

二・長編小説：『橋』上海美成出版公司、三二年四月。『莫須有先生伝』上海開明書店、三三年二月。『莫須有先生坐飛機以後』『文学雜誌』二卷七期から三卷五期連載（但し二卷二期〔五月〕を除く）、四八年一月から一〇月、

三・新詩：『水辺』（沈啓元と共著）新民印書館、四四年。『談新詩』新民印書館、四四年一月。『招隱集』（開元編）大楚報社、四五年五月。

四・評論集『跟青年談魯迅』中国青年出版社、五七年。

馮文炳(33) 廐名は中国現代文学史においてどのような作家としてイメージされているのか。以下に引用する劉西渭の文章は馮文炳という特異な作家像をよくあらわしている。

廐名先生、広大な読者とあれほど無縁だった作家のことを私は思うたびに、自分自身にこう問うてみる、まさに海鳥のような孤絶さではないか、と。現在活躍している中国の作家たちのなかには、廐名ほど私に好奇心を起させ、その転変をもっと深く考察したいと思わせる人物はいない。彼よりも通俗的な人、偉大な人、活発な人、新しく時流に乗った人はいるけれど、彼のように一層自分らしさをもった人はいない。……彼が再生産する作品はついに強烈な個性をもち、時流に迎合することなく、自らの不滅の隠逸の場所をもち、少数の者にとつて離れ難く帰るのを忘れさせる桃源をつくりあげているのだ。

馮文炳の隠士的孤高性を感じさせる独特な作風とは具体的にどのようなところにあらわれているのであろうか。それは周作人がいうように「文章の美」と「晦渋」というふたつのキーワードにまとめることができるだろう。周作人は「廐名君の著作が現代中国の小説界で独自の価値をもっている第一の理由はその文章の美にある」と述べている。馮文炳文学の個性はまず古代の詩詞の表現技法から学んだ洗練された言葉、簡潔で研ぎ澄まされた文体にある。だが文章があまりに簡潔すぎると、説明不足になり、作者のイメージに読者はついてゆけず、混乱してしまう。これが馮文炳文学の「晦渋」の正体である。つまり、周作人のいうように決して凡人に理解不能な難解な哲理があるせいではなくて、文体が「簡潔、奇僻、辛辣」であるため、読者が作家の提出するイメージの飛躍に追いつけないというわけである。馮文炳の「晦渋」さは一九二〇年代後期からより顕著になった。沈從文はその初期の文学を高く評価してい

るが、『莫須有先生伝』以降の作品については修辭上の遊戯性が過剰で、文言文を織り交ぜすぎて素朴さが失われているなどと批判をくわえ、『莫須有先生伝』は失敗作だといいきっている³⁵。

馮文炳は自分の審美感を信じて、ことばの美によって独自の芸術世界を築こうと腐心した。初期の流麗な美文が描く郷土文学は支持されたが、のちに文章美を追求するあまり凡人を寄せつけないテクニカルな文体を用いるようになり、読者や批評家の多くはやがて彼から離れていった。

二 『竹林的故事』

『竹林的故事』は馮文炳の処女小説集であり、同時に郷土文学作家として彼を位置づける代表作でもある。ここに収められた作品は一九二三年から二五年にかけて発表されたもので、その内容は以下のとおりである：「講究的信封」(『努力週報』四四期)、「袖子」(同五九、六〇期)、「少年阮仁的失踪」(同六五期)、「病人」(同七一、二期)、「洗衣母」(同七三期)、「半年」(同七五期)、「我的隣居」(二三年二月七日作)、「初恋」(同年二月一〇日作)、「阿妹」(同年二月一八日作)、「火神廟的和尚」(『語絲』一八期)、「鷓鴣」(二四年一〇月作)、「竹林的故事」(『語絲』一四期)、「河上柳」(『莽原』三期)、「去郷」(『語絲』三九期)。ほかに作者自身と周作人の序があわせ収められている。なお収録作品中最後の二編は序執筆の後に書かれた。

「『竹林的故事』序」で馮文炳は次のように述べている。

私が小説を書き始めたのは、一九二二年の秋のこと、現在までに全部で一五編書いたが、はじめの三編はここに収めなかった。もとは「講究的信封」、「少年阮仁的失踪」も収める必要はないと思っていた。……その他は、

「病人」がある時期の陰影を留めるほか、すべて現在の産物といえる。私は読者にこれらの作品から私の哀愁を探り出してほしいと願う。私はここで周作人先生を祝福したい。私自身の園地、それは周作人先生である。私自身、その園地、それは周作人先生が定めたものである。

馮序から、この短編集に及ぼした周作人の影響の大きさを知ることができよう。この点については次章で論及するので、ここでは『竹林的故事』の内容について述べよう。『竹林的故事』所収の作品のうち、馮序であがっている「講究的信封」、「少年阮仁的失踪」そして「病人」はインテリ青年の苦悶や悲憤を描いたもので、いわゆる郷土文学の範疇には入らないので論じない。『竹林的故事』のなかの郷土文学に属する作品群は、その内容から次のふたつのグループに分けることができる。

一、故郷の農村を舞台として馮文炳の幼少年時代に取材していると思われるもの。主人公はすべて「焱哥」、「阿焱」、「焱儿」と呼ばれる少年であり、彼と彼を取り巻く縁戚の少女や幼い婚約者らとの交流が基調になって诗情豊かな農村生活が描かれている。登場人物の呼称や相互の関係などは各作品だいたい共通している点で連作とみなすことができる。「柚子」、「半年」、「我的隣居」、「初恋」、「阿妹」、「鶉鴒」、「竹林的故事」がこのグループに属する。

二、一のような共通した人物設定をもたないが、やはり郷土に取材した作品。「洗衣母」、「火神廟的和尚」、「河上柳」、「去郷」がこのグループに属する。

次に第一のグループの作品について、簡単に紹介しよう。

「柚子」は「私」Ⅱ「焱哥」が幼少の一時期を外祖母のもとで従妹の柚子とともに暮らしたときの思い出を故郷の風物や年中行事などを織り交せて诗情豊かに描いた作品である。旧正月に「播窟眼鏡」というゲームで勝敗を競ったこと、柚子の水飴をこっそり失敬したこと、清明節にツツジを手折って贈ったこと、湖草（湖沼の底に自生する草で、

肥料にする)で旧劇の人物のような髭を作つて戯れたこと、大好物の菜心の煮付けを柚子がとくに自分にくれたこと、夏の月夜に脱穀場で興じたゲーム……幼年の甘美な思い出が地方色に彩られて鮮やかに描き出される。やがて「焱哥」は県城の学校へあがり、結婚し、また柚子は家の都合で奉公にだされる。こうして時間と運命がふたりを引き裂き、柚子は思い出のなかだけに生きる人になってしまう。幼年の回想と豊かな風物には誰しも安らぎと感動を覚える。そのためか「柚子」は中国現代文学の短編小説³⁶としては日本人の手ではじめて日本に翻訳紹介された作品のひとつである。「柚子」の続編といえるのが「鷓鴣」である。「私」Ⅱ「焱儿」が帰省して、偶然柚子が嫁ぐことになったという消息を耳にする。柚子の嫁入りにたいして複雑に揺れる心情を鷓鴣の鳴き声を真似しあつてはしゃいだ無邪気な幼年の思い出と重ねて描いた作品である。

「我的隣居」、「初恋」も語り手である「焱哥」の少年時代の追憶である。前者は帰省したときの幼い隣人との交渉を、後者は幼年時代に祖母のお寺参りにお供してそこで知りあつた少女との思い出を描いたものである。これらも「柚子」と同様に桑の実採りや盂蘭盆の行事など風物を効果的に織りこんで、詩情豊かな作品にしている。「半年」は幼い恋は絡まないが、語り手は「焱哥」である。安月給の役人生活に見切りをつけ、故郷の禅寺・鷄鳴寺に寄宿した彼は近くに住む少年とその祖母、寡婦である少年の母に出会う。母の苦悩、少年の反抗、祖母の慈愛を作者は暖かいまなざしで見守っている。禅寺の持つ静謐な雰囲気と老婆の慈悲が調和した作品である。

「阿妹」は馮文炳自身の七歳で夭逝した妹を悼んで書いたものである。全編にさまざまな習俗がちりばめられており、それは迷信的なものであるのだけれども、農村の愚かしさを際立たせるよりは、此岸から彼岸へと別れを告げた幼い妹にたいする哀悼の情緒を高める効果を出している。

表題作「竹林的故事」は「私」が私塾へかよっていた幼い頃の思い出である。私塾の近く、竹林のなかに三姑娘と

呼ばれる少女と両親が住んでいた。父は川で魚を採ったり、家のまわりの小さな畑で野菜を作ってそれを売ったりして慎ましく暮らしている。やがて三姑娘の父が死に、平和な生活には哀しみの影がさす。だが、彼女は相変わらず勤勉で慎ましく、母を助けて生きてゆく。三姑娘は「身につけているのは竹布（厚地キヤラコの綿織物）のひとえで、月と同じ淡い色をしていた。もちろん古いもので、もし新しくしたら彼女には合わない」。つまり、彼女は自然な素朴さをもつと同時に、世俗的な汚れからは無縁の気高さをもっている。そんなどこか神秘的な存在である三姑娘を竹林という人間とユートピアの中間に介在する世界のなかに描いた佳作である。

次に第二のグループの作品についてみてみよう。「洗衣母」は李媽という洗濯女の幸福とはいえぬ半生を描いた作品で、魯迅「祝福」を想起させる。しかし、旧中国の悪しき伝統にたいする強烈な抗議は希薄である。李媽は大酒飲みの夫と役立たずのふたりの息子を抱え、背むしの娘だけが彼女の助けで、慰めだった。夫の死後、息子は家出し、娘も先立ち、李媽は孤独だった。やがて李媽の家に住み着いた男が茶店を始め、李媽は男との再婚をのぞむが、人々の理解が得られず、諦めざるを得なかった。善良なのに報われない女の姿を淡々と、しかしもの悲しく描いている。「河上柳」は「洗衣母」と対をなす作品である。人形使いの陳老人は、人形芝居が上演禁止になったため生計を立てることができず、庭の柳を売り払わざるを得なくなった。この木は駝子媽媽、すなわち李媽が過ぎにし日、陳老人が人形劇を上演して帰宅が遅くなったときいつも足もとを見失わないように灯りを掛けておいてくれた思い出の木であった。木が切り倒された時、その枝がつくる木陰も消滅した。陳老人にとって柳の木陰は過去という安らぎの世界でもあったのだ。柳の木陰という人生の避難所を失った老人の哀れさがしみじみと描かれている。³⁸

「火神廟的和尚」は火神廟の住職に拾われ、その寺男となった金喜の物語である。彼は目の悪い住職を気遣い、小宝という犬だけを友に暮らしているが、俗世間離れした人間ではない。そんな彼の喜怒哀楽に彩られた暮らしを描

いている。「去郷」は病気で帰郷した「私」が、都会へ帰る途中、偶然に幼なじみの萍姑娘と再会するが、今は妻となった彼女に過去の恋情を告白することもできず、ひそかに苦悶しながら過ごした一夜をSという人物の遺稿という形で書いた作品である。

『竹林的故事』が描き出す郷土世界は現実離れた虚構性を強く印象づけられるものではない。少年、少女、老人を中心とした人物群像、彼らがひっそりと暮らす竹林や小川、丘陵に囲まれた村里、そこで起こる小さな波瀾、これらのひとつひとつはすべて現実でありふれたものである。周作人は「『竹林的故事』序」（一九二五年九月三〇日作、『語絲』四八期原載）で次のように述べている。

馮君の小説が現実逃避のものだと私は決して思わない。彼が描くのは大悲劇大喜劇ではなくただ平凡な人の平凡な生活である——これはまさしく現実である。特別な光と闇ももとより現実の一部である。しかし、それらの悉くを描く必要はない、もし書きたいという必要性を感じないのであれば、またいうまでもないが、このような経験がないのであれば、文学は実録ではなく、夢である。夢は決して目覚めているときの複写ではない。しかし目覚めているときの生活を離れては夢も題材がなくて成り立たない。

周作人は郷土という素材を文学に昇華するとき、それが現実に題材を得ている以上、たちあらわれた作品には現実そのものではないが、リアリティが宿るはずであるから、馮文炳の文学は決して現実逃避の文学ではないと説明する。周作人はまた、『竹林的故事』序にそのイメージを次のように書いている。

しかし、私はなぜかわからないが、いつも少し「隠逸的」なところがあって、ときにはささやかな温もりを捜して読みたいと思う。ちょうど太陽に照りつけられていながらも、ひとり木陰でのんびり腰を降ろしていたいと思うように。

人生や社会の厳しい試練に直面する人々に、その内面を暴きたてて強烈な刺激を与える文学もあるだろうし、必要でもある。だが、そんな人間の煩わしさや厭わしさから逃れ、木陰に隠れて静謐で淳樸で優しいほのかな温もりのある虚構の世界をひとり楽しみたいときもある。『竹林的故事』はそんな欲求を満たしてくれる。『竹林的故事』のこのような美的郷土世界は、舞台となる自然の美とそこに生きる人物の美が、馮文炳の独特の文章の美によって調和されることで構築されている。自然美、人間美、文章美がいわば三位一体となつてつくりあげた世界なのである。

ここでその自然と人間についてももう少し詳しくみてみよう。たとえば、『竹林的故事』は次の文ではじまる。

一本の河が城鎮から流れ出る。その河を越えて西に行く。すると土手のふもとに竹林がある。その竹林のなかに一軒の草ぶきの家がある。家の両側は菜園である。

この竹林の草ぶき家に三姑娘は住んでいる。竹林はまるで三姑娘の神秘性を護るベールのようである。しかし、それはすべてを遮蔽するような厳しいものではなく、竹林が風にそよぐとき三姑娘の清楚な月色の衣裳をまとった姿をかいまみさせてくれるのである。また、「柚子」は「県城から三里足らず」の外祖母の住む村里が舞台である。村の後方は「小河に抱かれ」、東はつつじが咲き乱れる丘陵である。小河の下流は湖沼地帯で湖草を売る筏がやってくる。「浣衣母」の舞台もやはり小河に抱かれた静かな村里である。李媽の家は村の入り口にある石橋のたもとの楊柳の樹のそばで、彼女は小河で洗濯をし、楊柳の木陰に席を設けて道行く人に茶を振る舞ってひとときの潤いを与える。小河、竹林、菜園、湖沼、花咲く丘、楊柳の木陰——このように、『竹林的故事』に描かれた郷土の自然は人間に歯向かう粗暴で野性的な自然ではない。時にはざわめき、さざ波も起こすが、人を守り、生活に恵みをもたらす、人間と調和する穏やかな自然である。

『竹林的故事』の人物たちも自然と同様に攻撃的権威的な存在ではない。作品中、印象的なのは「こども、少女、

翁、老女」たちである。彼らはいずれも俗物性を感じさせないすがすがしさがある。柚子や三姑娘など「私」の幼少時期の心のときめきの対象になった少女たちは肉慾的な官能美とは無縁である。彼女たちは自然で素朴、俗的な汚れない美しさで印象づけられる。こどもたちは純真で天真な「童稚美」をあらわしている。老人、老婦人たちは無欲で争わず、狡猾さもなく、ただ運命の定めに従って淡々と生きている。たとえば、李媽は再婚する希望をあきらめ、陳老人は思い出の柳を失うという運命をうけいれて、それぞれに歳を重ねる、というように。「竹林的故事」に生息する人々は生命力の源となる激しい欲望、性欲、名声欲、金銭欲などとは無縁の「詩化」された人である。

『竹林的故事』の自然も人間も貪欲さがなく、それゆえ現実中存在する自然や人間そのものというようなりアリティはない。沈從文は自らが創造する人物像と較べて、馮文炳の小説中の人物について次のように述べている。

いささかの憂鬱、知と未知にたいする欲望があり、宇宙の輝きへのめくるめきがあり、愛があり、憎しみがある——しかし、日光のあるいは暗闇のなかで、これらの魂はやはり騒がず、すべては自然と調和し、恐ろしく静かで、ぶつかりあうことがない。……作者〔馮文炳〕の文章が表現する性格、そして作者が表現する人物の性格はすべて母性を備えている。作者の特色はここにある。⁽³⁹⁾

『竹林的故事』の自然と人物は穏やかで慈悲深く人をつつみこむような菩薩的な雰囲気をもたえている。そこでくりひろげられる物語は決して空想的ではないが、欲望やエゴイズムといった俗塵を慎重に回避して濁りのない水のよくな美的郷土世界を構築している。その世界はユートピアというほどの距離感はないが、現実とも隔たっている。それが沈從文のいう母性的な郷土世界なのである。

『竹林的故事』のような雰囲気をもった作品は二〇年代の郷土文学のなかでは異色であった。沈從文は馮文炳とその他の郷土文学作家たちを相互に比較して論じているが、たとえば王魯彦とくらべて次のように書いている。

感慨の気分が深く作者〔魯彦〕を取りまいて、生活の不安が作品の傾向に影響を与えているため、魯彦君の作風は魯迅に近い。異質な成果であるが、その作風は無慈悲な風刺と憤怒となって、馮文炳の作風とはまったく趣きを異にしている。^④

馮文炳は何故郷土を「詩化」して描くことに精魂傾けたのであろうか。馮文炳が生活し見聞した郷土だけが悲惨でなかったわけではあるまい。また、彼が農村社会の負の側面に鈍感だったというわけでもあるまい。なぜなら、馮文炳は自己の少年時代を回想した文章で、当時の「烏煙瘴氣」たる小学教育を非難しているし、抗日戦争中には、口語文の教科書がなく、中学生が賭博ばかりしている開明的な思想からとり残された荒んだ風土を嘆いてもいるからである。苛酷な現実を注視するような作品を書かなかったのは「現実逃避」であつたと新中国成立後に自己批判している^⑤が、じつは馮文炳が『竹林的故事』という浄化された郷土世界を創造したひとつの原因は彼個人のもつ厭世的傾向によるのであるかもしれない。

馮文炳の生涯を追うと幾度か厭世的傾向を髣髴とさせるできごとがあつた。一九二七年の「失学」を機に西山に籠るようになってから、この傾向はより強まったと指摘されているが、早く『竹林的故事』にも己れの厭世観を吐露するような一文が収められている。それはすなわち「少年阮仁的失踪」である。この作品は失踪した阮仁という青年が友人、妻、両親にあてて彼自身の心情を告白した三通の手紙の形式をとっている。阮仁は故郷で旧式の教育を受けて、「悪濁した空気に包まれて」悶死しそうになっていたが、北京の大学に進学することでその心は解き放たれ、自由になった。それも一時のことで、北京での生活も「法律先生」の拘束を受け、結局阮仁のような「天才は屈服しなければならぬ。なぜなら天才は畢竟少数者であるから」。阮仁は逡巡のち、「最も自然で最も合理的なこの世での生き方」を求めて、友、妻、両親から離れる、つまり彼をとりまく現世からひとり逃走することを決意するのである。現

世に失望し、最も自然で合理的な生き方を求めて逃走した阮仁は馮文炳自身でないにしろ、ある時期の彼の心情が反映されていると考えられる。

俗世にたいして不満を感じたとき、中国の文人がとる伝統的態度はふたとおり考えられる。人間世にたいして慨世的態度をとるか、厭世的態度をとるかである。世の中を嘆き厭う気持ちから、俗世を実際に、もしくは心情的に離れて、自由な天地に遊ぶ厭世的な生き方は、中国の文人の理想であり、このような心情を文学に託する厭世的文学も古くからあった。その代表はいうまでもなく陶淵明である。馮文炳が浄化された郷土世界を創造するにあたって、この高名な田園詩人の影響を指摘する研究者は多い。たとえば、馬良春は思想的に「陶淵明、王維の隱士の作風」がみられると述べているし、楊義は次のように書いている。

賞賛に値するのは、エリオットやハーディの啓発を受けて、廢名は小説芸術において自然美の描写を重んじたけれども、彼の行文運筆、立意造境は依然として東方文明古国の民族的氣質と作風を深く保持していたということだ。彼の写景芸術は精神において陶淵明の田園詩の薰陶を受け、具体的な筆法は古代山水散文、とくに晚明小品の成果を受け継いでいる。⁴⁶

陶淵明が塵網を脱して帰去した故郷の田園の素朴な自然や生活に本然的な美を見だして、それを詩芸術に昇華して以来、陶淵明の後塵を拝する多くの文学者たちが時代を問わず出現した。馮文炳の文学は小説という散文形式をとりながらも、その雰囲気は陶淵明に通じるものがある。前述したように、馮文炳の故郷と陶淵明のそれとは長江を隔てた兩岸にある。このような風土的な近さも馮文炳が陶淵明にたいして特別な親近感を抱くひとつの要素となったにちがいない。

しかし、「郷土」という素材を近代的文学形式のなかに表現するとき、馮文炳は彼の個性と伝統的文学観のみを支

えとして自己の郷土世界を創造したのではない。馮文炳の個性や思想を理解し、啓発し、創作のエネルギーを与えてくれる同時代の導き手が存在した。それは馮文炳に「自己の園地」を定めてくれた人、周作人その人である。

三 周作人と馮文炳

1 二〇年代前期の周作人

『竹林的故事』の各作品が執筆された二〇年代前期の周作人の思想は『自己的園地』（北京農報社、二三年九月）、『雨天的書』（北京新潮社、二五年一二月）に大体集成されている。周作人の文学思想と生涯については、すでに多くの優れた論稿⁴³があるので、ここでは言及せず、『竹林的故事』成立と重なる時期の周作人の思想にのみ注目していきたい。

周作人は一九二六年に自らの思想的变化について次のように書いている。

ひとりの人間は、ある時期に、たいていは理想派になり、文芸と人生にたいしてなんらかの主義を抱くものである。私も以前はユートピアを夢み、「新しい村」につよくあこがれ、文学の上でもそれ相應の主張を持っていた。私はいまでも日本の「新しい村」の友人を尊敬してはいるが、そのような生活が自己の趣味を満足させる以外には、あまり警世の効力を持たないらしいことに心づくようになった。⁴⁴

二〇年代前期の周作人には、引用からもうかがわれるように、「思想の動揺と混乱」に見舞われていた。簡単に言えば、彼は以下のような足跡をたどった結果、「孔融から陶淵明」への道、すなわち人道主義的文学者から個人主義

の文学者への変化の道を歩みだしたことになる。

周作人は一九一三年日本留学より帰国、その後四年にわたる故郷紹興における寂しい教員生活を経たのち、一七年、新文化運動の指導的存在であった北京大学に教員として迎えられた。その翌年には「人的文学」、さらに「平民的文学」^④を発表、人道主義的文学の確立を提唱して、魯迅、陳独秀らとともに文学革命の旗手として、新文学運動の檢舞台に踊り出た。また、白樺派の思想に強く共感し、九州日向の「新しい村」を訪れたばかりか、北京に「新しい村」支部を設立した。二一年一月北京において「人生のための文学」をスローガンに掲げた文学研究会が成立すると、周作人はその主要メンバーとして参加した。だが、肋膜炎が再発し、同年六月から九月にかけて北京西山の碧雲寺にて療養生活をおくることを余儀なくされる。療養期の精神的煩悶は「山中雜信」^⑤によくあらわれている。「私のこの頃の思想の動揺と混乱は頂点に達したといえます」、「以前はトルストイの博愛、ニーチエの超人、共同生活主義や善種学、キリスト教・仏教・儒教・老子などの教訓や科学の例証、これらすべてを喜んできましたが、調和・統一することができなくなっていました」、「私の思想はひどく混乱しており、多くの問題について考えようとするのですが、どれも結論が得られません」などとあり、この療養期は彼がそれまでの思想について「信仰から懷疑に帰」する変折点であったことがうかがわれる。

療養を終えたのちの一九二二ころから顕著にあらわれてくるのが日本文化や中国の民俗への関心を示す文章である。この背景にはさまざまな外的要因がからんでいた。『北京周報』^⑥が創刊され、彼らが中国の文化界思想界との交流を積極的に行おうとして、周作人をその窓口として接触をもったり、義和団事件賠償金による対支文化事業計画のための委員会のメンバーに選ばれるなど日本との交流が活発になった。また、北京大学に歌謡研究会が設立されそのメンバーとして参加したこと、陳独秀との論争を機にそれまで主たる寄稿者としてかかわっていた『新青年』と疎遠

になったこと⁵²がある。さらに二三年七月に起こった兄魯迅との義絶事件が周作人の内面に及ぼした影響の大きさは、それまでの周氏兄弟の親密度を考える時、測り知れないものがある。以上のような状況のもと、また、二六、二七年の政治的混乱を経て、周作人はその作風が一変し、門を閉ざして読書三昧する文人というイメージが内外に定着してゆく。『竹林的故事』が書かれたとき、周作人はこのような変化に至る橋を渡りはじめていたのである。

では、周作人の文学観はどのように変化したのであろうか。それは多角的に検討をくわえる必要があるが、ここではその一側面として「人生のための文学」から「個性尊重の文学」への変化に注目したい。周作人は「自己的園地⁵³」に次のように書いている。

自己の心の傾向によつて薔薇やすみれを植えることは、個性を尊重する正常な方法である。たとえ各々が社会の恩に報いなければならないといわれたところで、私はこのようなことも社会に報いていると信じている。なぜならば、社会は果物や野菜、薬草だけを求めているのではなく、同じように薔薇やすみれも必要としているからである。

周作人は野菜や果物のように実用的な、つまり社会改造をもくろんで社会的メッセージを前面に出した文学ばかりではなく、心に安らぎや慰みをもたらす人の内面に働きかけるような文学も社会は求めているのだと訴える。彼は「芸術のための芸術」はもちろんであるが、「人生のための芸術」も「芸術を生活改造の道具とみなし」ている点で生活と芸術を分離しているとして退ける。そして、個人の生活に根ざし、「個人を主人として、その感情を表現する」、つまり外的な要請ばかりを重んじるのではなく個々の感情の自然な流露を表現した「独自の芸術美と無形の功利性」をもつ文学こそ真にあるべきものであると主張した。周作人は引き続き「文芸上の寛容⁵⁴」、「文芸的統一⁵⁵」など文学における個性の尊重を訴えた文章をつぎつぎと発表した。このような周作人の変化について、錢理群はつぎのように

述べている。

周作人は「下層民に同情し、社会主義に共鳴する」ことを特徴とする人道主義思想と「個性の独立と自由を尊重」する個性主義、自由主義思想——このふたつの思潮は五四時期に彼を引きつけたものであったが——のはざま、どちらかを選び取った。彼は自分という五四の「雑貨屋」から最も理想主義的色彩の濃い、過激な部分——空想的社会主義を棄て、「個人本位主義」を保留し、発展させた。彼は自分の本性によって、直感的に思ったのだから；いわゆる「五四精神」の本質は、すなわち「個性の解放と自由」であり、五四新文学の本質はすなわち「個性の文学」である、と。⁵⁶

周作人の変化の背景には「社会や人類の名のもとに社会文学の正統を打ち建て」て文学思想を統一しようとする目論み一部の評論家、いわゆる「新道学家」たちの出現があった。周作人は「多数決という方法で文芸に判決を下すことはできない」⁵⁸と彼らに警告するとともに、ある思想にもとづいた予定調和的な文学だけが文学だとされるような風潮にたいして周作人は危機感をつのらせた。なぜなら、それは新文学運動が全力で否定した旧時代の文学の悪しき伝統が新しい衣を纏って蘇ることになるおそれ、そして、周作人が自分自身の個性の文学として見出した対象を新道学家たちの無理解によって排斥されてしまうおそれを含んでいたからであった。

周作人は文学における個性の尊重や自由を訴える一方で、尊重されるべき彼自身の文学の個性を追求しはじめた。それは当時急速に顕在化した日本文化、神話、伝説、民謡やわらべうたなどを対象とした中国の民俗にたいする関心であった。このような関心は社会性のなさや現代性のなさという二点において誤解を受けやすかった。つまり、これらのテーマは直接現代の中国社会との関連がなく、復古的であるばかりか、迷信的な要素も受け入れるという点で、新文学運動に敵対するものとみなされやすかった。だが、周作人がこのようなテーマを選択したのは、じつは中国の

将来にたいする深い憂慮からなされたことなのであった。周作人は次のように述べている。

中国で今日切実に必要とするものは一種の新しい自由と新しい節制とである。中国の新文明を建設することは、とりもなおさず、千年前の旧文明を復興することであり、また西方文化の基礎である希臘文明と合一することである。このような言い方は大げさすぎるかもしれないが、思うにこれ以外に中国を救う道はないのである。宋以来の儒教の禁欲主義はすべて無用のものとなった。何故ならこれはただ縦欲を助長するだけで、調節する作用がないからだ。……日本も宋学の影響を大いに受けたけれども、生活の上ではむしろ平安朝の系統を受けついでいるということができ、なお多くの唐代の風流余韻を遺して、そのため生活の芸術を了解することもより容易である。⁵⁹

周作人の頭のなかでは、おそらく中国は三つの層が積み重なっているとイメージされていた。 magari なりにとも西洋近代文明の洗礼を受けた現在、その下に宋学の非人間的な偽道德に支配された時代、さらにその下に偽道德が発生する前の人間の自然な感情にもとづいた礼俗、すなわち「古俗」を有していた時代である。この三つの層の上に構築されるべき将来の理想的中国はいわゆる西洋文明のみに依拠して近代化を推し進めることによっては実現しないと周作人は考えた。彼は千年も前に中国に確かに現出していたはずの本来の意味での「礼」を現代に回生させることによつて、「禁欲と縦欲」の調和のとれた新しい世界が実現されると考えていたのである。それゆえに、周作人はまず「古俗」のありさまを現代に探り、そこからそのすばらしさを実感すること、理解することが肝要であると考えた。「古俗」の一部は日本や中国の民俗のなかに遺留されている。周作人が日本文化や中国の民俗に深い関心を寄せた根源はここにあったのである。中国には古くから周代に調和のとれた真の理想的社会があったという考えに代表されるような「古えに真あり」という思想があった。だが、周作人はこのような伝統思想のみを受け継いで、「古俗」に関心を

もったのではない。

周作人が「古俗」に深い関心を抱いた背景には、一九世紀より興った新しい学問であるフォークロアやエスノロジーの影響があった。周作人は一九〇六年、アンドルー・ラングの『習俗と神話』、『神話儀式と宗教』に出会って、神話伝説、わらべうたや民話に興味を抱くようになった。その後、フレイザーの『金枝編』から神話や習俗の文化人類学的研究方法論を学んだ。彼はまた、日本民俗学の動向にも着目し、柳田国男『遠野物語』や雑誌『郷土研究』も購入していた。このような関心はこれまでも彼を故郷紹興の童歌採集や北京大学歌謡研究会創設などの仕事にむかわせていた。フォークロアやエスノロジーの書物は、古代から受け継がれてきた習俗や伝説が決して荒唐無稽とか、迷信とかのレッテルを張って退けられるべきものではなく、そのなかには人為的に歪められていない自然な真実の人間感情が生きづいていることを周作人に教えた。『自己的園地』には「神話与伝説」なる一文が収められていて、アンドルー・ラングの学説を紹介しながら、神話や伝説の意義を述べている。

科学的解説から離れて、単なる文学という立場からみても、神話は独自の価値をもっており、軽蔑すべきものではない。いまだという神話などは、もともと文学であって、古代人の史詩や史伝、小説からでたのである。古代人がこれらを作ったのは、人々を騙そうと思つてのことではなく、実は彼らの素朴な感想を忠実に表現しただけのことなのだ。その内容や形態がどんなに奇異であろうと、自己表現という点において現代人の著作と大差ない。……中国ではおよそ多くのことが両極端である。一部の人はまだ神話のなかの信仰をもっており、一部の人は神話を非科学的な出鱈目として排斥しなければ気が済まない。私は神話などを信仰や攻撃の対象にせず、中立の位置におき、学術的考察をくわえ、文化史のなかに入れたらいいと思う。また古代文学という観点から、歴史的な批評や芸術観賞をくわえれば、かなり良い結果が得られると思う。

周作人は民歌についても「原始社会の詩である」として、詩の変遷を探るうえからはかりでなく、「最も強烈で価値ある特色はその真摯さと誠実さで、これは芸術に共通の真髓である」から新詩の創作の参考にもなると現代的意義を強調する⁶⁵。だが、このような周作人の「古俗」にたいする憧憬は、新文化運動に対する復古派の巻き返し⁶⁶が激しかった当時の中国において、復古的国粹主義的思想とひとからげにされて批難される傾向にあった。周作人が個性尊重の文学を訴えたのは、たとえ孤立無援の状況であっても自分の信じる道をゆくのだという彼自身の宣言であったといえるかもしれない。

2 『竹林的故事』における周作人の影響

『竹林的故事』における周作人の影響の絶対性は『竹林的故事』馮序の「私の園地は周作人先生の園地である。周作人先生によって定められたものである」という箇所⁶⁷に象徴的に語られている。周作人は『竹林的故事』序において馮文炳の文学を的確に批評している。周作人はつぎの三つの点で『竹林的故事』を評価する。

- 一、静かな温もりを与えてくれるものであること。
- 二、独自の芸術の道を歩んでいること。
- 三、平凡な人生を描いていること。

以上の三点はそのまま馮文炳が周作人からうけた思想的影響を具体的にあらわしている。

第一点は、馮文学が読者に与える印象について述べている。『竹林的故事』の世界は前述したように人間のキラキラした欲望の世界を描いたものではなく、老人、少女、子どもたちの織りなす水彩画のようなすがすがしい世界である。だから、彼の文学は強烈なインパクトや社会的メッセージをもったものではない。しかし、読後に安らぎやぬく

もりをもたらずやさしみのある文学である。つまり馮文炳の文学は必ずしも社会にとつて変革の契機になるような強い力をもたらない「自己的園地」でいう「薔薇やすみれ」の範疇に属する文学である。周作人は「薔薇やすみれ」の範疇に属する文学を無用と決めつけなければかりか、人々の精神の糧としてその効用を高く評価していた。馮文炳文学はこのような周作人の思想を受け継いでいたといえよう。

第二点は、馮文炳の文学者としての姿勢にたいする賛辞である。「薔薇やすみれ」の範疇に属する文学は当時決して多数派ではなかった。社会性と現代性に欠けるという理由で批判を浴びせられがちなのにもかかわらず、時流に迎合することなく、馮文炳は独自の文学スタイルを打ち建てるために孤独な芸術の道に踏込もうとしていた。周作人は次のように書いている。

馮君の著作における独立精神も私が敬服するところのものである。彼はここ三四年著作に専心しているが、一筋の道に沿って進み、彼の平淡朴訥な作風を發展させてきた。これはたいへん喜ばしいことである。……馮文炳君は内外文学から彼の趣味を涵養する一方、独自に彼の道を歩んでいる。これはいささか寂寞たる思いもするだろうが、しかし最も確実な進み方である。私はこのように彼が今よりもっと独自で固有の芸術の大道へと歩んでいくことを希望する。⁸⁸

周作人は「自己的園地」において文学における個性と自由の尊重を訴え、その結果文学者として孤独の道を歩まざるを得なくなった。馮文炳はこのような師の文学的態度にならって、独自の芸術的世界を創造するために孤独な道に歩みいった。周作人が馮文炳の文学的姿勢に賛辞を惜しまなかったのは、文学における個性の尊重という周作人の主張を馮文炳が実践していたからにほかならない。

第三点は、馮文炳が文学の題材を生活から遊離したところに求めず、郷土という身近なところに求めることによつ

て、決して生活の実録などではないが、人生と密接に絡みあった芸術世界を表現したことを評価している。馮文炳が文学創作の題材として郷土を選び、それを浄化された世界として描いたのは周作人の郷土意識と無縁ではない。周作人は郷土を描くことについてどのような考えをもっていたのだろうか。周作人は「地方与文芸」に地方、すなわち郷土を描くことの意味について書いている。その内容に沿って周作人の郷土文学観をみてみよう。彼はまず新文学の現状にたいしてつぎのように不満を述べる。

ここ数年来中国の新文学は少しずつ發達し、創作の各方面において相当の成果もあるが、まだ少し不足を感じる。それはなぜか？それはあまりに抽象化しすぎて、普遍的なある要求をとりあげて予定された概念を描きだそうと努めるので、かえって真の強烈な個性があらわれなくなってしまう、その結果單調さを免れないからだ。我々の希望は自分に課したこんな枷をはずして、自由に土から培われた自分の個性を發表してほしいということだ。

周作人は続いてこのような現状を救うヒントとして明代の自由な文学潮流を紹介する。そして、明代の小品文のよいうに、あらわれとして隠逸的なものでも反抗的なものでも、党派的な固定觀念にもとづいて不自然に拵えあげられたものではなく、「遺伝や環境と融けあつて生まれた真の心の鼓動さえあれば」存在意義があるという。なぜならこのような作品は「自然に具うべき特性である国民性、地方性、そして個性、すなわち生命を具えている」からである。さらに彼は人は所詮「大地の子」であり、大地に忠実に生きることこそ人生の正しい道であるから、そのように生きて「土の息吹きや泥の味わいを血脈のなかに滲み透らせ、それを文章にあらわすことこそ、真の思想であり文芸である」と述べる。

周作人は郷土には作家の個人生活と密接に関わっているものばかりでなく、遺伝や環境と融けあつて作家の内部に受け継がれてきた民族的な特性も含まれていることに注目している。ここには、もちろん「負」の特性もあれば、

「正」の特性もある。「正」の特性とは、周作人が新しい中国の建設に必要と考えた偽道德に支配される以前の古代中国に存在したはずの本然的な礼俗にほかならない。郷土文学は生活に密着しつつ作家の個性を表現するばかりか、民族の古層に潜む本来の人間の善性をもあらわしうるものである。このような二重の意義をもつ郷土文学を周作人は己れの思想を最もよく実現し得る現代文学のひとつの形式と考えたのではないだろうか。周作人は「竹林的故事」序において、ことさら人生の艱難ばかり書き立てる必要はないと述べているが、「与友人論懷郷書」においても「廃然」という友人（廃名のことか？）に次のように書き送っている。

およそ懷郷、懷国、懷古などで懷うことはすべて空想のなかの情景です。もしあるがままを述べたとしたら、何も愛すべきところがありません。……あなたのいうように自然と人生の美を人の力で發展させて愛すべき世界を作ろうと努めることは正しいし、大切です。私たちは理性的には国を愛すべしといいますが、国をちゃんとしなると私たち個人の生存の自由がなくなってしまうので、利害上こうせざるを得ないだけです。もし私たちに本当にこの国土や郷土を愛させようとするなら、まずそれを愛すべきものにしなければなりません。

古えの美しい礼俗や民族の真の精神世界を探るためばかりではなく、愛国心や郷土愛を育むためにも、周作人は郷土を主題とした文学は必要であると考えていた。彼の郷土文学觀を受け継いで、馮文炳はひたすらに麗しい菩薩的な郷土世界を『竹林的故事』のなかに創造したにちがいない。

また、注目すべきことは、周作人自身が一九二〇年代初めにいくつかの郷土に取材した作品を書き残していることである。たとえば、「初恋」⁷⁰や「娛園」⁷¹である。これらはいずれも周作人の少年時代のみずみずしい初恋の情感を描いたものである。「初恋」は少年の頃、一時杭州で過ごした彼がその名も三姑娘という隣家の少女にはじめておぼえた恋情を綴ったもので、「娛園」は紹興城外の叔父の屋敷娛園で従妹に恋した思い出を書いたものである。これらの

内容や雰囲気は、『竹林的故事』中の「柚子」など、焔哥を主人公とした作品群に通じるものがある。これらの作品は馮文炳に故郷を描くうえである種のインスピレーションを与えたのかもしれない。

周作人が馮文炳『竹林的故事』に与えた影響は以上のように大変大きかった。沈從文の次の文は周作人と馮文炳の影響関係をよく説明しているだろう。

文章について、馮文炳君の作品があらわす趣味は、それは周先生の趣味である。文体が似ているのはごく当たり前のことなので多くは述べない。周作人先生の嗜好に影響されたものが馮文炳君の作品が成立する素となつてゐる。このような考えは武断的憶測に近いものの、まったくの誤りではあるまい。

『竹林的故事』のなかに描きだされた抒情的郷土世界は周作人と馮文炳の師弟が共同で築きあげたものであったといつても過言ではないであらう。

結 び

一九二〇年代の郷土文学にはふたつの流れが存在した。ひとつは、郷土の否定的側面を深刻に捉え、写實的にその厳しい現実——醜さ、残酷さ、不条理さを描き出して、世の人びとに悪しき社会の改革を訴えかける「慨世」の文学としての郷土文学であり、いまひとつは、俗世にたいして田園を真の人間感情が生きづいてゐる世界とみなす伝統的な文学観に支えられ、抒情的に郷土を描き、田園生活の中の人間の善性を描くことで、消極的ではあるが俗世の悪を否定する「厭世」の文学としてのそれである。概世的郷土文学は魯迅の影響のもと、王魯彥、許欽文らによって創作され、厭世的郷土文学は周作人に師事した馮文炳によって創作された。郷土文学のふたつの流れのそれぞれの源に魯

迅・周作人という対照的な文学生涯を送った兄弟がいたということは、極めて象徴的なことである。

郷土文学登場の時代背景を考えると、文学において一九二〇年代とは、大出版社のメジャー雑誌『小説月報』が誌面を刷新し新文学の牙城になったことに象徴されるように、旧文学も依然勢力を保持していたものの、新文学が樹立され、多様な姿をとって発展していった時代であったといえよう。だが、この時期に新文学陣営内部には理想社会の実現を焦燥するあまり、また、旧勢力の巻き返しを警戒するあまり、文学の社会的効用ばかりが取り沙汰され、旧いものすべてを遅れたものとして否定する風潮も生まれていた。この風潮を周作人は無視できなかった。彼は初期の熱心な童歌の収集に見られるように、旧いものなかには自然な人間感情の表出があり、それを自己認識のよすがとして社会改革を促すことができるが一貫して考えていたからである。厭世的郷土文学は旧いものを否定する風潮にたいする周作人の危機感、怒りが核になって生みだされたといえるだろう。

郷土文学のふたつの流れは、一九三〇年代にそれぞれに受け継がれ、発展していった。概世的郷土文学は革命文学思想をとりこんで、農村の矛盾をより鋭く描く攻撃性の強い文学になっていった。厭世的郷土文学は、時流から遊離している印象はあるが、沈從文のような才能豊かな後継者たちが出現し、彼らによって抒情的郷土世界は完成されていった。沈從文は「郷下いなかを書くときであるが、廢名先生と似たところがある」と馮文炳びんから影響を述べている。沈從文のように馮文炳の郷土世界を通過することで己れの郷土世界を創造した作家は少なくない。馮文炳が郷土文学の発展に果たした役割は無視されるべきではない。そして、馮文炳文学における周作人の存在の大きさを考えるとき、周作人の郷土文学に果たした役割の大きさも忘れてはならない。

- (1) 「第六章郷土写実派小説 第三節廢名：田園文学的郷土作家」『中国現代小説史』一卷、人民文学出版社、八六年九月。
- (2) 茅盾（署名玄珠）『小説研究ABC』八章、世界書局、二八年八月。聞一多『女神』之地方色彩』『創造周報』五号、二三年六月一〇日。
- (3) 新民印書館、四四年一月一〇日。
- (4) 『古今』二〇・二二期合併号、四三年四月一六日原載。署名葉堂。『葉堂雜文』（新民印書館、四四年一月）に収録。『談新詩』再録。
- (5) 陶明志編『周作人論』北新書局、三四年二月。
- (6) 馮文炳のほか、俞平伯、沈啓无、江紹原。
- (7) 主要参考文献：陳振国『馮文炳伝略』、同『馮文炳文学活動年表』、馮健男『說廢名的生平』いずれも中国現代文学史研究資料匯編陳振国編『馮文炳研究資料』、海峡文芸出版社、九〇年。郭濟訪『夢の真実与美——廢名』花山文芸出版社、九二年七月。
- (8) 廢名『我做小孩的時候』『大公報』副刊『星期文芸』、四六年一月一七日、『馮文炳研究資料』所収。題名は『馮文炳研究資料』編者による。
- (9) 同前。陶淵明の詩は「歸去來辭」よりの引用。
- (10) 廢名『五祖寺』『文学雜誌』三卷四期、四八年九月。のち『莫須有先生坐飛機以後』の一章として収録。
- (11) 廢名『廢名小説選』序『廢名小説選』、人民文学出版社、五七年十一月。
- (12) 『嘗試集』、亜東図書館、二〇年七月。
- (13) 廢名『我在武昌讀書的時候』『談新詩』原載、『馮文炳研究資料』所収。題名は『馮文炳研究資料』編者による。
- (14) 『新青年』六卷二号、一九年二月一五日。のち『過去的生命』（北新書局、二九年一月）に収録。
- (15) 浅草社は二二年北京と上海で成立。主要メンバーは馮至、林如稷、游国恩など。二三年三月、上海で『浅草』季刊を創刊（二五年一月、四期で終刊）、『芸術のための芸術』派として注目を集めた。

- (16) 鲁迅『中国新文学大系・小説二集』導言』『中国新文学大系・小説二集』、上海良友圖書公司、三五年七月。
- (17) 鲁迅・周作人共訳著、商務印書館、二三年。国木田独歩他の作品を収録。馮文炳に『現代日本小説集』(『晨报副鐫』二三年九月一五日付)がある。
- (18) 二七年一〇月、張作霖政府の弾圧により一五四期で停刊。その後上海で続刊され、三〇年三月一〇日、五卷五二期で終刊。
- (19) 廢名「忘記了的日記」『語絲』二二八期、二七年四月三日。
- (20) 同前。
- (21) 趙聰「新文学作家列伝」台湾時報出版社、八〇年六月。
- (22) 馮健男「說廢名的生平」『新文学史料』二期、八四年四月。馮文炳は魯迅に師事するか、それとも周作人かに悩み、結局周作人を師として選んだという。馮文炳はその後革命文学論争のなかで魯迅を批判した。参考：丁武「馮文炳」『中国自由運動大同盟宣言』『駱駝草』一期、同「閑話」『駱駝草』三期。魯迅は廢名「知堂先生」、「關於派別」(『人間世』二六期、三五年四月二〇日)の反論として「勢所必至、理有固然」(『魯迅全集』八卷『集外集拾遺補編』、人民文学出版社八一年)を書いた。
- (23) 周作人「懷廢名」によると、馮文炳は仏教の解釈について熊十力と意見が合わず、よく論争をしたばかりか、つかみ合いになったこともあるという。
- (24) 二六期、三〇年一月三日で停刊。
- (25) 二五年二月一〇日創刊。張恨水らが主編をつとめたが、三六年一〇月より周作人、馮文炳、兪平伯、林庚が編集に参加。日中戦争勃発後停刊。四五年一月二〇日、復刊。
- (26) 知堂「談新詩」序「談新詩」および「苦口甘口」(上海太平書局、四四年一月)所収。
- (27) 四二〜四六年まで二〇章書き継ぐが、未発表。
- (28) 三七年一月、北京で創刊。朱光潜主編。日中戦争のため停刊。四七年六月一日復刊、三卷六期で四八年一月停刊。
- (29) 廢名「廢名小説選」序には新中国の理想人への脱皮を焦燥する心情があらわれている：「解放後皆がリアリズムのスローガンを唱えた。私はひどく反省し、心からこれを擁護した。リアリズムとは現実を写すことである。現実を写すことができ

るためには、自分の政治的覚醒を必ずや高めて、共産党員のレベルまでもっていかなければならない。」

(30) 趙聰『新文学家族列伝』による。『馮文炳研究資料』はこの箇所について確かではない旨の注をつけて収録している。

(31) 八〇年代以降に出版されたものは次のとおり：『馮文炳選集』、人民文学出版社、八五年。『廢名選集』、四川文芸出版社、八八年。『廢名散文選』、百花文芸出版社、九〇年。『廢名・田園小説』、上海文芸出版社、九三年。

(32) 一九〇二年生れ、江蘇省淮陽県人。ペンネームは開元など。燕京大学に学び、周作人「四大門生」のひとつ。日中戦争中北京大学教授となり、華北作家協会の評議員もつとめる。のち、周作人と不和になり、破門される。著作に『近代散文抄』など。

(33) 劉西渭（李健吾）『画夢録』——何其芳先生作『咀華集』、文化生活出版社、三六年二月。

(34) 周作人『叢』与『橋』序『看雲集』、開明書店、三二年一〇月。

(35) 沈從文『論馮文炳』『沫沫集』、上海大東書局、三四年。

(36) 二三年、『北京周報』に丸山混迷訳で掲載。丸山は周作人と親父のあった同誌の記者で、「支那の田舎気分や地方人の生活内容が窺はれて面白い」と「袖子」を訳した理由を述べている。

(37) 「竹林的故事」より引用。

(38) 廢名「散文」（発表年月など不明、『馮文炳研究史料』所収）によると、「浣衣母」の主人公李媽は馮文炳の叔母で、その家の門前に柳があり、これをヒントに両作品を書いたという。

(39) 沈從文「論馮文炳」。

(40) 沈從文「論馮文炳」。

(41) 廢名「我做小孩子的時候」。

(42) 陳振国「馮文炳伝略」。

(43) 廢名「廢名小説選」序。

(44) 青木正児『支那文芸論叢』二三・支那文芸に溢れたる高踏的気味』『青木正児全集』第二卷、春秋社、七〇年七月二〇日。

- (45) 馬良春「一位具有獨特風格的作家(代序)」『廢名選集』、四川文芸出版社、八八年。
- (46) 「第六章郷土写実派小説第三節廢名：田園文學的郷土作家」『中国現代小説史』一卷。
- (47) 主要参考文献：松枝茂夫「周作人先生のこと」方紀生編『周作人のこと』、光風館四四年。飯倉照平「初期の周作人についてのノート」(Ⅰ)・(Ⅱ) 神戸大学文学会「研究」三八号、四〇号、六六、六七、六七年。張菊香、張鉄栄編『周作人研究資料』上・下、天津人民出版社、八六年一月。錢理群『周作人伝』、北京十月文芸出版社、九〇年九月。劉岸偉『東洋人の悲哀』、河出書房、九一年八月三〇日。
- (48) 「『芸術与生活』自序二」「語絲」九三期、二六年八月三二日、署名豈明。のち『芸術与生活』(上海群益書社、三二年二月)所収。訳文は飯倉照平「初期の周作人についてのノート」(Ⅰ)による。
- (49) 「人的文学」「新青年」五卷六期、一八年二月一五日。「平民的文学」「每週評論」五期、一九年一月九日、署名仲密。
- (50) 第一信から六信まであり、「晨报副刊」に掲載(二二年六月七、二四日、七月二、一七、二一日、九月六日)。署名仲密。のち『雨天的書』所収。
- (51) 二二年一月創刊、極東通信社発行。三〇年九月、四一三号で廢刊。
- (52) 当時、周作人は錢玄同、沈兼士、沈士遠、馬裕藻とともに「主張信教自由宣言」を『晨报』紙上に発表(二二年三月三一日)、これは陳独秀との信教の自由をめぐる論争に發展した。その結果、周作人はかつての盟友『新青年』同人たちから離れていった。
- (53) 二二年一月二二日付『晨报副刊』に「自己的園地之二」として掲載。署名仲密。
- (54) 二二年二月五日付『晨报副刊』に「自己的園地之二」として掲載。署名仲密。
- (55) 二二年七月一日付『晨报副刊』に「自己的園地之一六」として掲載。署名仲密。
- (56) 錢理群『周作人伝』二四八頁。
- (57) 「文芸的統一」。
- (58) 「詩的効用」(二二年二月二六日付『晨报副刊』に「自己的園地之五」として掲載。署名仲密)。

- (59) 「生活与芸術」『語絲』一期、二四年一月一七日。のち『雨天的書』収録、署名開明。訳文は飯倉照平「初期の周作人についてのノート」(Ⅱ) 引用の松枝茂夫訳を参考にした。
- (60) 『知堂回想録』香港三育図書文具公司、七四年四月、一九七〇一九八頁。また周作人(署名周啓明)「一点回憶」『民間文学』六二年六期参照。
- (61) 『知堂回想録』、六八六頁。
- (62) 同前、六九九―七〇〇頁。また、周作人「遠野物語」(『夜読抄』北新書局、三四年九月)、「一点回憶」参照。周作人と日本民俗学については、今村与志雄「魯迅と周作人と柳田国男と」『現代思想』三卷四期「特集柳田国男」、七五年(のち『理智と情感』筑摩書房、七六年五月二〇日所収)に詳しい。
- (63) 辛亥革命後、故郷紹興に帰った周作人は「紹興県教育会月刊」に「兒童話釈義」「兒歌之研究」ほかの文章を発表している。また、歌謡研究会は一八年北京大学に成立、主要メンバーは周作人、劉半農、錢玄同、沈尹默ら。二二年二月一七日、『歌謡周刊』創刊、二五年六月二八日、九六号で停刊。初期周作人の民俗学との関わりについては飯倉照平「初期の周作人についてのノート」(Ⅰ)、(Ⅱ)参照。
- (64) 二二年六月二九日付『晨报副刊』に「自己的園地之一四」として掲載、署名仲密。
- (65) 周作人「歌謡」(二二年四月二三日付『晨报副刊』)に「自己的園地之一」として掲載、署名仲密。
- (66) 二二年初めころから、雑誌『学衡』を中心に新文化運動に反対する論調がおこり、新文化の陣営では魯迅、茅盾らが学衡派批判をくりひろげた。
- (67) 「ある人はこう疑うだろう：周作人の説は伝統主義に近く、中国人がもつとも好む国粹主義である、と。私はこう答える：断じてちがう、と。」(周作人「地方与文芸」『自己的園地』所収)。
- (68) 周作人「竹林的故事」序。
- (69) 二五年五月七日作、「雨天的書」所収。
- (70) 二二年九月一日付『晨报副刊』に「夏夜夢八」として掲載、署名槐寿。のち『自己的園地』所収。

- (71) 一九年三月二十八日付『晨報副刊』、署名槐寿。のち『自己的園地』所収。
- (72) 沈從文「論馮文炳」。
- (73) 沈從文『夫婦』編付記。